

# 『クランフォード』にさす鉄道の影

小池 滋

私が大学に入ってまだ間もない頃、イギリス十九世紀にギヤスケル夫人という小説家がいると知って、最初に原文で読んだ作品が『クランフォード』だった。もっと正直に言うと、当時読むことのできた彼女の唯一の作品だった。イギリスに注文して買うなどということは、終戦後間もない頃の貧乏学生が夢にも考えられなかったのだ。

でも、この作品はとても気に入った。とくに最初のあたりで、ブラウン大尉が発表されたばかりのディケンズの『ピックウィック・ペイパーズ』を絶讃して、町の名門のおばさんと喧嘩になるあたりでは、『ピックウィック』大好きな私は有頂天になった。ブラウン大尉とはこの先ずっといい仲になれるなど大喜びしたが、次の章で大尉は鉄道事故で死んでしまい、私はしゅんとなってしまった。なぜ作者は、こんな魅力的な登場人物をあつさり殺してしまったのかと、私は文句を言ったものだ。その上、大尉を殺す手段に鉄道を使うなんてと、猛烈に腹が立った。天国のギヤスケル夫人に、あなたは鉄道が嫌いなのか、鉄道に何か怨みでもあるのかと抗議の手紙を書きたくなった。

これは何も私が鉄道好きだからのことではない。公平客観的に考えて、なぜ鉄道を、と考える日本人も多くいるのではないかと思う。私自身その時以来長いこと考えていたが、なかなか答えを出せなかった。十九世紀イギリス小説を、その文化的背景から理解しようと長いこと苦勞したあげ句、やっと明答とは言えないが、ヒントらしいものを見つけたので、以下記すことにしたい。ギヤスケル夫人に文句をつけた私は間違っていたと、反省のつもりで。

日本で鉄道が開業したのは明治五年（一八七二年）で、何もかもイギリス人の指導に従って実現した。開業日の記念列車に明治天皇を乗せたが、イギリス人が聞いたらよくもそんな大胆なことを、と驚いたのではあるまいか。この一事が示すように、当時の日本人はイギリスで世界最初の鉄道を開業してから、もう半世紀近くたっていて、鉄道は高度に発達し、安全は保障されていると信じていたの

だろう。

だが、『ピックウィック』が発表された頃の本国のイギリスでは、鉄度はまだ不安と恐怖を一般の人に突きつけていた。世界最初に鉄道という最高科学技術を開発したという自負はあったが、現実には問題が山積していた。一八三〇年にリヴァプール・アンド・マンチェスター鉄道という、世界最初の近代的鉄道会社が開業したが、その開業式の記念列車にももちろん国王は招待されなかった。誰もそんな無謀なことを言いだせなかったのだ。

最高のセレブはウェリントン公爵だった。当日もっとも得意になって喜んでしたのは、ウィリアム・ハスキソンという、リヴァプール選出の代議士だった。反対者が多かった一般市民を説得して、やっとこの日を見ることができたのだから、当日の実質的最高功労者と自負していたろう。ところが、このお目出たい日に、記念列車が途中の小駅で給水停車をしていた時、危険だから勝手に客車の外に出ないようにとの警告が出されていたが、お偉いさんは言うことを聞かなかった。線路上で談笑していた時に、後続の機関車（スティヴンソンが運転していた）が突込んで来て、ハスキソンはひき殺されてしまった。鉄道会社やスティヴンソンに責任がないことは誰にもわかっていたが、この惨事は全国に知れわたり、多くの一般市民はショックを受けた。誰か個人の責任を迫及して問題が解決されれば、気持はすっきりするのだが、誰にも責任がないということになると、悪いのは科学技術そのものか、文明の進歩そのものが悪なのか。

もうこれ以上の解説は不要だろう。最先端科学技術の栄光は、常に危険や悲劇と紙一重だということを、一般市民は理屈の上で納得したのではなく、何となく痛感した。今世紀の日本の原子力開発についての一般市民の反応を考えれば、よく理解できる。ギヤスケル夫人にとっても、ディケンズにとっても、鉄道は栄光と恐怖の象徴として、その作品の中にいやでも顔を出さずにはいられなかったのである。『クランフォード』の中にある人物は、「ブラウン大尉さまがあの癩（しゃく）な鉄道めにひかれなすったのです」（第二章）と言う。なぜこんなに悪しざまに言うのか、本人にも理屈の上ではわかっていないのだろう。

『クランフォード』の中のブラウン大尉の『ピックウィック』礼讃がもたらしたドタバタのエピソードは、いろいろな人にいろいろな発言をさせることとなった。夏目漱石の『文学論』の中の長い引用と説明はよく知られている。イギリス

十九世紀における文学の新旧交代とか、エリート教養と大衆文化の衝突とかは、いまさら私がくどくど述べる必要もないほど有名なテーマとなっている。

私が提示する十九世紀イギリス文学と鉄道の相関関係は、ちょっとこじつけのように思われるかもしれない。しかし、ディケンズの『ドンビー父子商会』やギャスケル夫人の『北と南』などの、もっと巨大な小説を読むと、いやでも頭に湧いてくるテーマが他にもいくつかある。ここでは述べることは遠慮するが、どなたか興味のある方が議論を展開してもよいのではなかろうか。

(東京都立大学名誉教授)